

願いをもって地域の人と関わり、地域のよさを伝えたい
 という思いを高める子ども

— 小学2年「あるいて きて 見つけよう ～石橋町のキラリ たんけん隊!～」の実践から —

1 単元のねらい

学校の周りの町を探検することを通して、地域の人やものに進んで関わり、地域に親しみを持ち、そのよさを伝えたいという思いをもつことができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級の子どもたちは、1年生の時に1年間を通して隣接する幼稚園の年長児と関わりを持ち、相手の気持ちを考えながら活動をしてきた。この取組を通して、自分がやりたい遊びや活動に没頭して取り組むと同時に、「この遊びをしたら相手はどう思うかな」「楽しいかな」と相手の気持ちや立場に寄り添おうとする姿が見られるようになってきた。隣にただいるだけの年長さんという対象だったが、「一緒になかよく」という視点をもち活動することで、「一緒になかよく遊ぶためには」という問いをもつ姿が表れた。

2年生になり、1年生を学校案内する活動を行った。「やさしく、安全に、楽しく」というめあてを意識し、1年生を一人にしないようにと手をつなぎ、声をかけながら歩く姿が見られた。このように、対象は変わっても、その人と自分との関わりの中で、「次はこうしたい」「こうしたら、どうなるかな」「やってみよう」とさらなる願いや問いをもち追求する姿を期待している。

しかし、少し広い視野で見ると、学校にはいろいろな人がいて働いておられることや家族や友だち、先生、学校に出入りする様々な人とのつながりが自分の生活を支えてくれていることにはまだ目を向けられていない。このような実態を踏まえ、本単元では、学校の周りの人と出会い、子どもたちのくらしを支える大切な人であることに気付くことができるようにすることをねらう。

(2) 本単元の内容と生活科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

本単元では、このような姿を目指すために、関わる対象を学校内の身近な人やものから、学校の周りの人やものに広げ、一人一人の思いが繋がる学習をしていく。ここで、子どもたちと関わらせたい対象として、石橋町の町を取り上げた。石橋町は古い町並みであり、昔から人と人との関わりが深く、そこに住む人のくらしをしっかりと支えている。このような魅力ある対象との出会いをすることで、子どもたちは、「この臭いはなんだろう? あのお店に行ってみたいな」というような気付きの芽生えがもてると考えた。この気付きを、自分の願いに引き寄せて問いをもつための手立てとして、お店やそこで働いておられる人に着目する。初めての探検の際には、一つのお店に行き、お店の様子や働いておられる人に出会う場を設定する。この活動を振り返る中から、「他の店はどうなっているのだろう?」「他のお店の人にも話を聞きたいな」と問いが繋がっていくと考える。そして、「キラリを見付けよう」と提案することで、子どもたちがより主体的に追求の方向を明確にしていけると考えた。これは、学級で一人一人のよさを見つけることを“キラリ”として取り上げていることを生かしたものである。ここでの気付きを自覚化したり、学級全体で共有化したりしていくためにクイズという形で見付けたことを紹介する場を設定する。その場で「石橋町のキラリをわかりやすく伝える」という視点で活動することで、見付けたことを伝え合う学び合いの場で人やものへの問いが繋がっていくと考えている。

(3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

石橋町を子どもたち一人一人が探検したい、探検を通して学んだことを生かし、伝えたいという思いを高めるためには、対象を徐々に広げながら、追求が深まっていくようにすることが大切である。そのために、石橋町への探検を2回計画した。1回目は、学校の周りの様子の比較から石橋町の町並みに着目し、町の様子について予想を立て、それを確かめに行く活動である。2回目の探検では、1回目の探検で見付けたお店に着目し、石橋町のキラリを見付ける活動である。1回目の探検の中で、一つのお店の人との出会いをすることで、「他のお店はどうか?」「何があるのかな?」という問いにつなげ、「あのお店に行って話が聞きたい」「もっと知りたい」という願いへと高めていきたいと考えた。

石橋町への探検で見付けたことや出会った人について伝え合う場面では、伝え合う手段としてキラリクイズのリハーサルを行う。クイズをする対象は隣の学級(2年2組)である。同じ探検をした2組の子どもを相手に、「自分たちはこんな石橋町のキラリを見付けたよ」と、伝え合う活動を取り入れることで、石橋町という町に対する親しみの気もちを自覚化できるようにしたい。また、リハーサルを行う目的を明確にして活動することで、町への気付きが明確化され、「わかりやすく伝えるためにはどんな工夫をしたらいいかな」という新たな問いにつなげていきたい。このリハーサルを行う中で「どんなことがキラリなのか伝わったかな?」「よくわからないことはあるかな?」と掘り下げること、「もっと分かりやすく伝えるためには」という視点を明確にした学び合いにつなげたい。そして、「まだ知らないことや知りたいことがたくさんある!」と問いが連続していく中で、自分たちのくらし学校の周りの町についての見方がより豊かになっていく姿を目指していきたい。

3 展開計画 (全20時間)

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	学校の周りにはどんなものがあるのか見つけよう	1 2	・屋上から学校の周りがあるものを見付ける。 ・学校の屋上から見た、学校の周りの様子について話し合う。
		3・4 5・6	・もっと知りたくなった場所に出かけ、どんなものがあるか見付ける。 ・出かけて見付けたことを出し合い、「わくわく探検マップ」を作る。
2	石橋町のキラリを見つけよう	7	・「わくわく探検マップ」と航空写真を見比べて、学校の西側と東側の建物の違いについて考える。
		8	・学校の西側(石橋町)の様子について予想を立てる。
		9・10 11	・石橋町を探検し、町の様子について調べる。(石橋町探検①) ・石橋町を調べて分かったことを出し合い、もっと知りたくなったお店について、聞きたいことを考える。
		12・13	・お店に出かけて質問し、キラリを見付ける。(石橋町探検②～キラリ探検隊～)
3	石橋町で見付けたキラリを伝え合おう	14・15	・石橋町を探検で見付けたことやものを絵で描いたり、写真を使ったりして、「石橋町のキラリ」クイズにまとめる。
		16・17	・「石橋町のキラリ」クイズのリハーサルをしながら、石橋町のキラリをもっと分かりやすくするためにアドバイスし合う。
		18	・「石橋町のキラリ」クイズを通して、石橋町で見付けたことやものなど、隣の学級(2年2組)に石橋町のキラリを伝える。
		19・20	・石橋町で見付けたことやものをもとに、「石橋町キラリマップ」を作る。

4 授業の実際

(1) 願いをかなえようとする問いが生まれる対象との出会わせ方

① 必要感のある問いが連続し、対象への興味が高まる出会わせ方の工夫

学校の周りの人との関わりをもつために、「学校の周りのことを知る」ことを大切にしたい。毎日の登下校等を通して見ている範囲のことしか知らない子どもたちにとって、学校の周りの様子を全体として捉えることから始めた。そのためまず、学校の屋上から「周りの様子を知る」活動を行った。屋上から見えるものをカードにかき、マップ作りをした(図1)。この活動から、「屋上から見えないところには何があるのかな?」という共通の疑問が生まれたところで、学校の周りを探検することにした。学校の周りを歩くと屋上からは見えないものがたくさん見付かった。建物、道路、水路、生き物、植物など、子どもが見付けたものは多岐にわたる。見付けたものをマップに付け足し、このマップとともに航空写真を見せ、気付くことを出し合った。

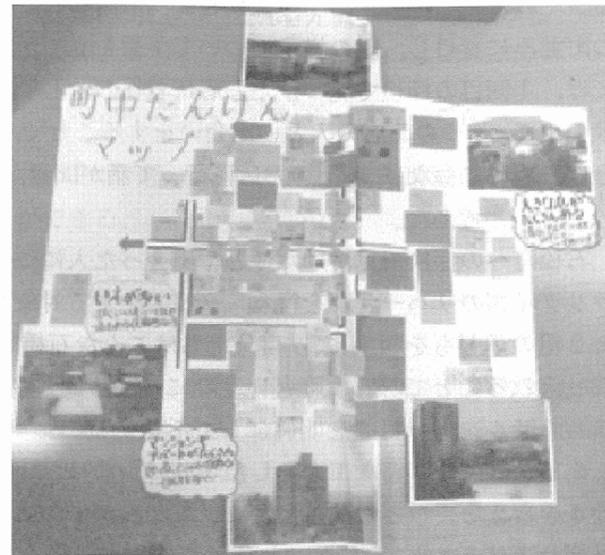


図1：町中たんけんマップ

- ・東は、大きなお店が多い。
- ・西は、家がたくさんある(黒っぽい)。森がある。
- ・北や南は、大きな家(マンションなど)が多い。

大きく分けると上記のようになり、この話し合いから、「まだよく分からないところや行ってみたいところはないか」と問いかけたところ、他の方角には少ない黒瓦のある石橋町に興味を持った。石橋町はバス路線ではあるが、行ったことがない子どもが多く、どんな建物があるのか意識したことのない対象であった。そのため、「どんな建物があるのか」「お店はあるのか」「本当に古い建物が多いのか」といった問いが生まれ、それを確かめるために探検に出かけたいという願いや思いの高まりに合わせて探検に出かけることにした。子どもの思いや願いの高まりに寄り添う単元構成の中で、見る視点が明確になり、対象への興味も高まっていく姿が見られると考えた。

② 願いをかなえたいという思いが高まる対象との関わらせ方の工夫

石橋町への1回目の探検の中で、一件のお店に立ち寄った(図2)。子どもたちが知りたいことを自由に質問する中で、「150年前からやっているよ。」という言葉に子どもたちは一番驚いていた。学校への帰り道に、「他にも古くからやっているお店があるのかな?」と投げかけると、「このお店も昔からやっているかもしれないね。」というような言葉も聞かれた。この活動を通してお店に対する興味が高まり、他のお店にも行ってみたいという声が上がった。そこで、子どもたちが見付けたお店の中から六つを選び、行ってみたいお店に分かれて行くことに



図2：魚屋さんとの出会い

した。お店に行って知りたいことはたくさんあったが、学級の共通のめあてとして「お店のキラリを見つける」ことを視点として与えた。一人一人が知りたいことを聞く中から、お店のよさを見付けることで、お店やそこで働く人に親しみをもって関わるができるようになったためである。このように、対象に対して親しみをもちながら活動をすることが、「もっと知りたい」「関わりたい」という思いの高まりにつながっていったと考える。

(2) 問いを追求できる学び方を獲得するための支え

お店への見学を通して見付けたことを、他のグループにどのように伝えるのかということを考える場面では、「お店のキラリ」をクイズにして伝えるという方法をとった。この方法は、それぞれのお店のキラリをクイズにするために、何をどのようにクイズにして伝えるかを考えることを通して、お店のよさを見付け、伝えるという追求の方向性が明確になると考えたためである。

図3は、そば屋に見学に行ったグループが見付けてきたキラリである。このキラリをどのように、他のグループに伝えるかを話し合い、紙芝居という方法を思いついた。原稿を作り、紙芝居にかき、発表の練習をしていた。この段階では、これ以上付け加えることや見直すところはないと言っていた。しかし、内容は、聞いてきたことをそのままとめてあるもので、お店のよさが分かりにくいものであった。そこで、発表の姿をビデオに撮り、見せたところ、「字が見えにくい。声が聞こえない。」という意見に加え、「わかりにくい。」という意見が出たため、「何が分かりにくいのか?」と問いかけると、「キラリかな・・・」という答えが返ってきた。そこで、「もう一度何がキラリなのか考えてみよう。」と投げかけることで、話し合いのきっかけを作った。この話し合いを通して、何年前にお店ができたのかということ(図3(ア))をクイズの中心として取り上げて、お店の人のすごいところを伝えていこうというグループとしての考えがまとまった。

- (ア) 65年前からやっている。
- (イ) そばを切るのが速い。
- (ウ) 同じ長さに切るのがすごい。
- (エ) そばのもとを細かくする石臼の機械があり、粉がさらさら。

図3：そば屋で見つけたキラリ

二つ目のグループは、醤油屋へ見学に行ったグループである。このグループは、お店のよさをたくさん見つけ、それをパンフレットのようにまとめることになった(図4)。お店のよさが明確で伝わりやすいと思われたが、キラリを伝えるということよりも、パンフレットをいかにきれいに作るかということに力を入れ始めた。その姿を捉え、もう一度、めあてに立ち返って考えるように声をかけた。

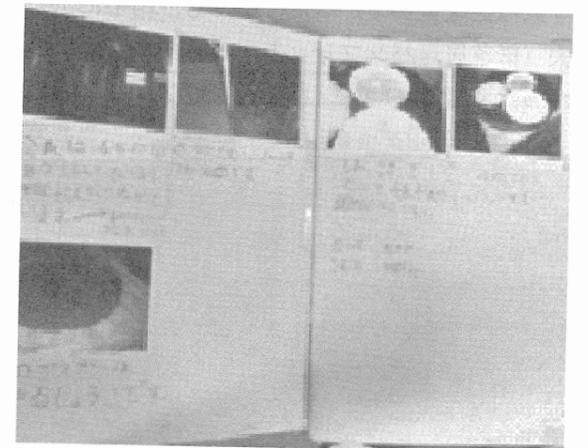


図4：醤油屋のパンフレット

このように、自分たちでも気付かない追求の方向性のずれに気付けるようにし、時には一旦最初に戻って考えてみるようにはたらきかけることは、学び方の獲得には、とても有効なはたらきかけだと考える。

(3) 学び合いの設定の工夫

単元を通して学級全体のめあてをもち、さらに、一人一人が個のめあてをもちながら学習に取り組む中で、自分の考えや活動を確かめたり、深めたり、振り返ったりする学び合いの場を設定している。ここでは、その中から、第3次に行った「石ばし町のキラリを伝えるクイズ大会のリハーサル」の学び合いの場面を取り上げて検証する。

① 気付きの広がりや深まりをねらいとした学び合いの場面の設定

「石橋町のキラリクイズ大会のリハーサルをしよう」では、グループごとの発表をもとに、キラリがもっとよく伝わるようにするために、他のグループがアドバイスをする学び合いの場を設定した。

そば屋グループの発表後の学び合いの場面では、発表の仕方と内容に関わるものの両面の意見が出た。

活動後のふりかえりには、次のように書かれていた。

(そば屋のよさが)ちゃんと伝わっているとおもっていましたが、少し分かりにくかったと思いました。アドバイスしてもらったことをみんなで考えたいです。(児童A)

- ・話し方が少し速かった。
- ・一つのキラリを一人が言った方がわかりやすいと思う。
- ・キラリを言ったんだけど、少しわかりにくかった。
- ・クイズはもっと難しい方がいいと思う。

図5：発表後のアドバイスや気付いたこと

リハーサルは、自分たちにとって一番分かりやすい方法だと考えて、話したり見せたりしていたことを周りから見えてどうだったのかという意見をもらう場である。このリハーサル、そして、アドバイスを通して、自分たちが見付けたキラリを、相手に分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを一緒に考えていく場であるということを確認した(図5)。このことで、アドバイスという形で言ってもらうことを肯定的に受け止め、もっとよいものにしていきたいという思いをもつことができたと思う。

② 活動を振り返り、問いが連続する学び合いの場面の設定

リハーサルが終わってから、2つの視点で活動を振り返った。一つ目は、各グループの発表を見て感じたこと、二つ目は、アドバイスを受けて感じたことである。各グループの発表を見て感じたことでは、声の大きさや分かりやすさ、方法など、自分たちの発表と比較してどうであったかを振り返った意見が多かった。中でも、相手に伝えるための方法に対しては、それぞれのグループの工夫(紙芝居、パンフレット、パネルなど)への関心が高く、それぞれのよさに目を向けたものが多かった(図6)。

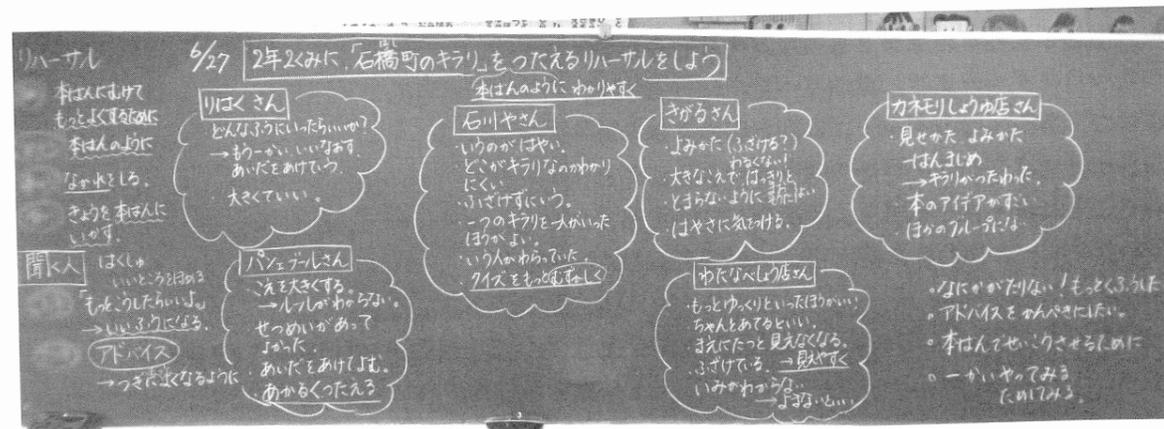


図6：リハーサルの中で出たアドバイスや気付いたこと(全体)

しかし、発表の仕方についての意見が多かったため、お店のよさについて目を向けている発言を広げ、伝えたいことが伝わったのかという視点で振り返るようにした。すると、「もう少し、お店のよさが伝わるように話すとよい。」「お店にあるものがよく見えるように写真を大きくするとキラリがよく伝わると思う。」など、お店のよさを伝えるための発表の仕方はどうであったのかというふりかえりが出てきた。このようにめあてに対して何を振り返るのかという視点を明確にすることで、次のめあてにつながるふりかえりが生まれていく。そして、このふりかえりを次のめあてにつ

なげるために、アドバイスされたことに対してどうしていきたいのかという具体的な取組に目を向けるように投げかけた。児童Cは、初めは下線部①にあるように、「キラリがわかりにくかった。」という漠然とした捉えであった。しかし、「本番に向けてもっと練習をしたい」という学級全体の思いが高まったところで、「何がしたいの?」と投げかけることで、下線部②のように「もっと(お店のよさが)わかるように紙芝居を工夫したい。」という具体的なめあてへと変わっていった。この場面は、児童Cが自分では気付かなかった、お店のよさを伝えるために何が必要かということを感じ取った瞬間である。この学び合いを通して、一人一人が次へのめあてを明確にし、一人一人の思いを大切にしながらグループで再検討し、本番に臨む姿につながった。

- T : それぞれのグループの発表で周りのみんなからアドバイスしてもらったんだけど、これをどうする?
 児童B : 今日できていなかったことをいろいろと教えてもらったから、本番の時にしっかりとやりたい。
 児童C : 自分はいいと思ってたけど、キラリが分かりにくかったんだなあって思いました。①
 T : 次が本番だけどうしますか?
 児童D : もうちょっと練習したい!
 児童E : もうちょっと考えたい!
 T : アドバイスしてもらったことをやってみようということ?
 児童 : はい。
 T : じゃあ次の時間に何がしたいの?
 児童C : キラリが分かりにくかったって言われて、もっとわかるように紙芝居を工夫したい。②
 児童F : アドバイスを完璧にしたい。
 児童G : アドバイスを実行して本番に向けて成功させたい。
 児童H : アドバイスを直して、本番にむかいたい。

このように、本時のめあてを柱にして、発表後に生まれる問い、さらに、学び合いを経て深まりよりよいものにしていきたいという願いから生まれる問いへと、問いがつながる姿が表れた。

5 おわりに

身近な人への気付きや、親しみをもつためには、どのような出会わせ方をするかということがとても大切なことが確認できた。最初の出会いから問いが生まれ、その問いを追求していく中からもっと知りたいこと、まだ分からないことといった次の問いが生まれていく姿が見られたことは、よい出会いができた結果である。また、子どもの思いに沿いながら、繰り返し対象と関わることを通して親しみが愛着へと深まる姿も見られた。

その一方で、追求の深まりには、個人差があることも事実である。一人一人との対話を通して個々の思いを深くとらえ、集団の中で個が生かされるようにしていくことが大切である。

単元の終わりに、お世話になったお店に手紙を書く活動を行った。その手紙には、見学をさせていただいたお礼はもちろんであるが、自分が見付けたお店の素敵なお店(キラリ)も交えて書かれているものがあった(図7)。また、休みの日に家の人と一緒にお店に行き、直接見学のお礼を伝えたり、買い物をしたということを日記に書いたりしている子どももいた。このように学習を通して地域の人と関わったことが地域への愛着につながった。これからも、子どもの心に響く学習を実践していきたい。

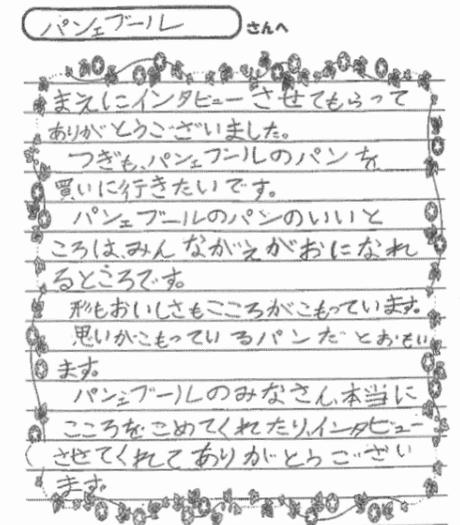


図7：お礼の手紙

(文責 和田 律央)